

深イ～話！

No.152

——「空気は読まない」（医師 鎌田實著）より——

2002年の春、突然、山口さんという夫婦から電話がかかってきた。

面識はない。

話を聞くと、どうもコンサートの“押し売り”らしい。

ヴラダン・コチというチェコのチェリストのコンサートを開いてくれないか、という

突然の申し出に、ぼくの態度は煮えきらなかった。

山口夫妻は食い下がってくる。

すばらしい音楽家だ、と熱く訴える。

何度か電話をもらううち、彼らは書籍のプロモーションが本業で、押し売りなどではないことがわかってきた。

知人から紹介されたチェコ人チェリストの音楽と人柄に惹かれ、ボランティアで協力しているだけ。

コチが病院や福祉施設でチャリティコンサートを開けるよう、交通費から何からすべて持ち出しで奔走し、通訳やアテンドも引き受けているらしい。

山口夫妻をこんなにも魅了したチェロを、ぼくも聴いてみたいと思った。

コンサートの日がやってきた。

ヴラダン・コチは40代なのに少年のような顔をしていた。

吹き抜けになっている病院のロビー。

ふっと一瞬、天を仰ぐと、彼は弦に弓をあてた。

初めの一音を聴いたとたん、ああ、すごいと思った。

澄んでいる。

音があたたかい。

力強く、重く、それでいて、やわらかい。

不思議なチェロだった。

コンサートは大成功だった。

これほどの技量をもった男が、なぜボランティアでコンサートをしているのだろう。

不思議に思いながらも、豊かなチェロの音色に、ぼくの心はわしづかみにされていた。

一年ほどして、また山口夫妻から電話をいただいた。

今度は二つ返事で承諾した。

そのころ、病院の緩和ケア病棟に、がんの末期を迎えた51歳の女性が入院していた。

彼女は、^{たてしな}蓼科の森のなかで小さなフランス料理店を営んでいた。



お店ではいつもクラシック音楽を流していたという。

ロビーでホスピタルコンサートの話をすると、彼女はその日を楽しみに待った。

しかし、彼女のがんは体じゅうに広がった。

日に日に衰弱していった。

コチの二度目のコンサートの日、ロビーに下りていく体力は残されていなかった。

どうしても彼女にコチのチェロを聴かせてあげたい、とぼくは思った。

病院の二階にある緩和ケア病棟の、彼女がいる奥の部屋まで音が届くように、ドアをすべて開け放った。

コンサートが始まる一時間ほど前、ロビーでピアニストと音合わせをしていたコチに、彼女のことを話した。

「二階の病室で、あなたの音楽を聴いている人がいる。そのつもりで弾いてあげてください」

すると、コチの目の色が変わった。

即座にチェロを手にする、彼女の部屋へ案内してほしいと言う。

「私は音楽を欲している人のために、音楽を届けにやって来ました。その患者さんのところで弾かせてください」

病室に入ると、コチは柔和な笑みを浮かべて、彼女の手を握った。

そして、チェロを奏ではじめた。

言葉はいらなかった。

バッハの『無伴奏チェロ組曲』に続いて、『浜辺の歌』が静かにはじまった。

まさか日本の歌を弾いてくれるとは思わなかったのだろう。

彼女の目に涙があふれてきた。

心にしみいるチェロの調べに浸りながら、自分の人生を振り返っているように見えた。

演奏が終わると、コチは彼女にハグをして病室を出た。

二人とも、いい笑顔を浮かべていた。

彼女は、かたわらにいたご主人に「ありがとう」と言った。

すべてを受容したのだと思う。

がんが末期であることも、自分の命がつきようとしていることも。

そして、がんが見つかったからの半年、世話をしてくれたご主人に「さようなら」を伝えた。

それから、横にいたぼくの手を握った。

「ありがとう。幸せです」

命がつきようとしていることを自覚してなお、この女性は幸せだと言う。

遠い異国からやって来た男の音楽が、病室の空気をあたたかく包み、一人の人間を「受容」へと導いたのである。

すごい音楽家だと思った。